

学生自主学習支援

中国学科 月田 尚美

高等言語教育研究所は、学生による自主的な言語に関する勉強会、研究会を援助している。今年度は 3 グループが支援対象となった。以下、各グループより提出された活動報告書を掲載する。

英文法研究会

英米学科 岡本 直樹

英文法研究会は、英語という言葉そのものに興味を持つ学生が自分たちの言語知識を増強する目的で発足した会です。現在、毎週木曜日の 4 限目の時間に、図書館のグループ学習コーナーを利用して活動しています。メンバーは 3 年生 3 人と 4 年生 3 人です。メンバーの内訳は必ずしも全員が英語学系のゼミ生ではなく、英語教育学系のゼミ生もいます。英語に興味があれば、文学系の学生や他学科の学生でも歓迎です。異なる専門の学生が違った視点から言葉を見つめ、意見を共有し合うのが本会の目指すところです。

共通テキストとしてラーセン・フリーマンらの *The Grammar Book* を使用し、毎時間担当者主導で輪読を行います。文法書の輪読の他にメンバーが共有したい情報があれば会の冒頭で提示することもあります。例えば 2015 年度では、革新的な英語表現 I の教科書 *Atlantis* を批判的に検討したり、論文レビューを行ったりしました。本年度は教職課程の学生が多かったため、本会でも英語（科）教育についての話題が多くありました。

具体的に今年度取り上げた話題は、「7 文型について」（二重目的語構文など）、「命令文」（主語はいつでも You?）、「there 構文について」（there 構文の特質を探る）、「前置詞とイメージ・スキーマー英語学習への応用」（認知言語学の考え方を英語学習や英語教育に活かすには）、「擬音語と擬態語」、「Aktionsart（動作様態）」（語彙的アスペクトや日本語の「-テイル」について）、「仮定法」などです。また、*The Grammar Book* では、「標準英語とは何か」や「生成文法における言語分析の方法—樹形図を使って」など、多岐に渡る内容を学び、討論しました。

今年度は manaba を使った活動報告の他に Facebook に特設ページを設け、広く本会の活動内容を知ってもらえるよう努めました。また、回数は多くありませんが、名古屋外国語大学の教育系の学生自主勉強会と提携し、共同で研究会を開くこともありました。

MAG 翻訳研究会

国際関係学科 上手 結有希

ヨーロッパ学科フランス語圏専攻 花井 万里奈

翻訳研究会ということで複数の言語に翻訳されている作品を選び、日本語特有の表現を中心に調査した。取り上げた作品は「千と千尋の神隠し」ほか日本のアニメーション、ライトノベルで文体や日本語を使ったコミカルなシーンが含まれるものである。また、それに先立ち「翻訳とは何か」ということも参考文献を読みつつ議論した。

一口に翻訳といってもその幅は広く、直訳から豪胆訳と呼ばれるものまで多種多様である。翻訳家一人一人でも、その訳し方には言語のみならず文化への知識の影響、作品を読む対象の想定の違いもあって大きな違いがある。まず、私たちの中であがった疑問は翻訳において「言葉の背景にある文化はそのまま伝えられるべきなのか、翻訳先の文化に擬えて伝えられるべきなのか」ということだ。読者が文脈を読み取れることを重視して行うのも編集者として必要な配慮だが本来のニュアンスが消えてしまう可能性もある。例えば豪傑訳と言い、焼き栗をおでんの屋台とする、ある西洋ファンタジー映画では精霊、神の類を毘沙門天と翻訳した例がある。その風習慣習、宗教観や民話の知識がない人に対する配慮、理解しやすいことを第一とした翻訳でありローカライズ化ともいえるが作品そのものの世界観の保持にはならず、逆に崩壊させてしまう可能性もある。

洋書、洋画は異文化を楽しむ、知るという楽しみもある。しかし極端なローカライズ化はそれが不可能になりひいては文化の理解につながらない。「不思議の国のアリス」の多くの訳書には注釈が付いており、翻訳しきれない部分を補完するという手段もある。しかし、映画字幕には制限が存在する。「千と千尋の神隠し」では「番台」、「祠」といった日本語のほか敬語が登場し、火を吐く怪物の「ドラゴン」と水神の「竜」の違いや米のまじない、「神」も一神教と多神教の差が存在する。など日本人の多くなればそれら舞台装置の意味に気付き、受け入れるが異なる文化圏の人が映画を実際に見るとき、どのように受け取られるのだろうか。今私たちがしていることは、まず先に挙げたような宗教に関すること、敬語の表現、漢字で表記される日本特有という印象のある単語（着物など）、他言語に翻訳されたとき原語版の差異がある部分を日本語、英語、フランス語を中心に比較している。最終的に、正しい翻訳とはなんなのか、この場合敢えて日本語のまま残したのはなぜなのかを突き詰めていく。

ポルトガル語研究会

国際関係学科 木戸 志緒子

2015年度、ポルトガル語研究会は3年目を迎えました。今年度は月毎にテーマを決めて活動することを目標にしましたので、各月のテーマに沿って報告します。

5月：ブラジル国歌 2015年5月30日に行われるブラジルフエスタのオープニングセレモニーで、ブラジル人学校の生徒たちと一緒に‘Hino Nacional Brasileiro’を歌うための練習をしました。この練習はポルトガル語やスペイン語を履修している学生と合同で行われ、このイベントと一緒に参加しました。翌日の5月31日にはブラジルフエスタの清掃ボランティアに参加し、仕事をしながら食べ物や、歌や踊りを見てブラジル文化を体験しました。

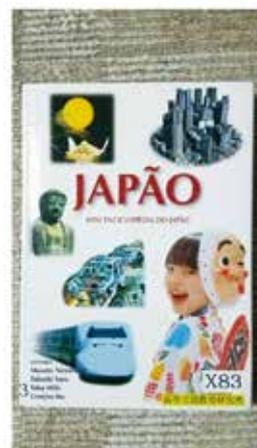
6月：メール・鵜飼 家で書いたメールをブラジル人留学生に添削してもらい、最初と最後の挨拶などよく使う表現を教えてもらいました。メールを書くことによってポルトガル語入力に慣れることができます。また、7月5日には木曾川の鵜飼を訪れ、帰国する留学生の送別会を行いました。その前後に鵜飼についてのポルトガル語の資料を読みました。

7月：鵜飼・住民票 ポルトガル語Ⅲの講義と連動させ、ブログに載せる鵜飼の記事をブラジル人留学生に添削してもらいました。また、ポルトガル語表記の住民票を利用して、役所で手続きによく使う表現を見ましたが、あまり使わない表現も使っていることが分かりました。

10月：HORÓSCOPO ポルトガル語のフリーペーパー‘vitrine’にある占いをポルトガル語で読みました。メンバーの星座名を確認して運勢を読みましたが、使っている単語に意外と難しいものがあり、短い文でもいろいろ学べて面白かったです。

11月：日本文化紹介 ‘JAPÃO-MINI ENCICLOPÉDIA DO JAPÃO’を活用しました。日本の人口、領土、四季についての基本情報から伝統文化まで、身近なことを学ぶことができ、留学にも役立つ内容でした。

ミニ百科事典



12月：留学応援 2016年からポルトガルとブラジルへ留学する学生のために、入門テキスト「ニューエクスプレス ブラジルポルトガル語」で会話を中心に練習しました。サンパウロ大学から帰国した学生が体験をもとにアドバイスをしたり、留学生が発音の見本を示したりして、グループならではの活動ができました。

活動は例年通り週1回 iCoToBa で行いました。今年度は、日系ブラジル人の学生、留学生、留学から帰国した学生、来年留学する学生など様々なメンバーと一緒に活動することができました。急に留学前の学生が増えた時もすぐに教材が用意でき、目的に応じていろいろ活用することもできました。

高等言語教育研究所に1年間ご支援いただきありがとうございました。



活動風景